

第 151 号 (2014)

〒733-0032 広島市西区東観音町 8-10

NPO ワールド・フレンドシップ・センター

理事長：山根美智子 館長：Richard&Xinia Tobias

TEL (082) 503-3191 FAX (082) 503-3179

E-Mail: wfchiroshima@nifty.com

URL: <http://www.wfchiroshima.net/>

WFC blog: <http://www.wfcpeace.blogspot.jp/>



はじめに

ワールド・フレンドシップ・センターの季刊誌「友愛」2014 年秋季号をお届けします。皆様には、日頃から変わらぬご支援をいただき、厚くお礼申し上げます。また、フェイスブックにも、最新情報を載せておりますので、Facebook: World Friendship Center (Hiroshima)もご覧ください。私たちは、相変わらず忙しく、この「友愛」がお伝えするのはその行事の一端に過ぎません。

今計画中の楽しみにしているイベントは、センターの 50 周年祝賀行事です。この準備状況について、木戸マサ子と山根美智子が報告しています。

また、ワールド・フレンドシップ・センターに関わる行事として、館長のリチャード・トバイアスが、今年の 8 月 6 日、センターや平和公園で行われた行事について報告します。同じく 8 月には、ハーブ・ツチヤさん一家の広島訪問がありました。ハーブ・ツチヤさんが感想を寄せています。6 月の“Fun Time in English”でディーン・マクローリンさんが、ニュージーランドについての話しをし、その記事を載せています。

広島修道大学の 2 人の学生、^{おさだあやね}長田彩音さんと森田奈々さんが、9 月にワールド・フレンドシップ・センターでインターンをし、その体験談を書いています。最後に、今年度の北東アジア青少年ピースキャンプについて、ジム・ロナルドが紹介しています。参加した中学生・高校生、斉藤友里さん、渡辺沙弥香さん、中島琴美さんの記事も載せています。

ワールド・フレンドシップ・センターの50年を願みて

木戸マサコ

私が初めてWFCを訪れたのは、縮景園で創立記念式が行われた後の 1965 年のことでした。当時、WFCは南観音にありました。通りを隔ててもう一軒被爆者や来訪者のための家がありました。初期のころ、バーバラ・レイノルズは経済的援助のほとんどを彼女の友人たちからの寄付に頼っていました。1971 年、WFCは翠町に移転しました。バーバラは、典型的な日本家屋に住みたかったので、翠町の家は希望どおりでした。同じ年に、アメリカ委員会がカリフォルニアのラ・ヴァーンに創設されました。

バーバラが、広島を去りカリフォルニアに帰ってから、いろいろな館長たちがWFCに来て有意義な貢献をしてきました。例えば、WFCが経済的に困っていることを知って、館長たちの一人はハワイから黒サンゴを取り寄せ、それをアクセサリーにして売ったり、外国人宿泊者のために大きいサイズの蒲団を作ったりしました。さらに、当時のWFCスタッフは報酬なしで働きました。会員の誰もが強いボランティア精神で働いていました。1986年、WFCは皆実町に移転しました。それと同時に森下弘氏が原田東岷医師の後を継いで理事長になりました。WFCは再び1995年に皆実町から現在の東観音町の日本家屋に移転しました。家はあまり新しくありませんが、くつろいで会って語り合える場所です。

2014年にWFCは平和と文化理解を深めていく研修施設として認可されました。もし今日、バーバラが生きていたら彼女はとても喜ぶことと思います。

2015年WFCの50周年記念

山根美智子

WFCは、来年50周年を迎えます。バーバラの蒔いた一粒の種が、今もヒロシマの地にしっかりと根を下ろし、きれいな花を咲かせています。このWFCの50周年をお祝いして、2015年の4月に50周年記念行事を計画しております。アメリカから、バーバラの娘さんのジェシカさんや、レイノルズ一家、元の館長などが出席される予定になっています。皆様もぜひ、この記念すべき行事に参加されますことを、心から願っております。

50周年記念行事日程表

日付	行 事
4月 8日(水)	この日までに来広 
4月 9日(木)	WFCで歓迎ポットラック・パーティ
4月10日(金)	縮景園清風館で 50周年記念式典  シュモアハウス見学 

<p>4月11日(土)</p>	<p>流川教会で One World Peace Concert 14:00~16:00</p>	
<p>4月12日(日)</p>	<p>WFC で礼拝 シンポジウムと座談会 14:00~17:00</p>	
<p>4月13日(月)</p>	<p>ツアー 平和資料館、バーバラの碑など WFCで話し合い</p>	
<p>4月14日(火)</p>	<p>一泊旅行: 神楽門前湯治村 送別会</p>	
<p>4月15日(水)</p>	<p>帰広</p>	

WFCでのプレゼンテーション —ニュージーランドについて—

ディーン・マクローリン

“Fun Time in English”で母国についての話をしてほしいとセンターから依頼があり、私はとても光栄に思いました。ニュージーランドの話ができるのを嬉しく思いました。しかし、さて一体どれだけの人が私の国の事を知っているだろう…。最初は少し不安がありました。実際には、参加者の多くがニュージーランドの事をとてよく知っていて、そのうちの何人かは行ったこともありました。とても意外でした。

ニュージーランドの貴重な産物や文化・風習等について、写真をお見せしながら説明しました。それから、ラグビーの代表チーム「オール・ブラックス」の有名な haka(ハカ)のビデオを見ました。haka というのは試合前に士気を高めるために行う、とても力強いパフォーマンスです。皆さんからたくさん質問がありました。また皆に見せるために地図を持ってきてくれた人もいました。このように参加者の方々がとても熱心で協力的なので、私のプレゼンにも一層力が入りました。

ニュージーランドの食べ物のフルーツカバブや純粋ミルクチョコレート、キウイとクリームをのせたメレンゲ生地の定番スイーツ「パブロバ」を食べて、私のプレゼンを締めくくりました。

私は、ワールド・フレンドシップ・センターでとても素敵な時間を過ごしました。車地さんをはじめ、当日参加していただいた方や手伝いをして下さった皆さん、どうもありがとうございました。今後も、より国際的な発表の場に参加できればよいと思います。



(左からシーニア、ディーン、車地さん、西田さん、池田さん)

8月6日、原爆の日

リチャード・トバイアス

毎年8月6日に平和公園で広島市による記念式典が執り行われます。何千人もの人々が1945年の原爆投下で亡くなった人たちに祈りを捧げるために集まります。長年8月6日は晴れの日が続きましたが、今年は雨でした。それでも数多くの人たちが平和公園を訪れました。この日、WFCにはカナダから、4人の引率者と学生達が滞在しており、センターのボランティアの人に車で平和公園に連れて行ってもらいました。

毎年、各国の大使が記念式典に参列します。式典は8時に開始され、8時15分にみんなで黙祷しました。1945年8月6日午前8時15分、原子爆弾が広島の上空で炸裂し広島は瓦礫と化し、子供を含む数多くの罪もない人々が亡くなりました。数えきれないほどの人が、ひどいやけどをし、次から次へと亡くなっていったのです。その年の12月末までに14万人の方々が亡くなりました。

また、被爆後何カ月も、何年もたった後に、原爆による放射能がもとで癌を発症し、何千人もの方が亡くなりました。

記念式典に続き、1965年にWFCを設立したバーバラ・レイノルズの記念碑に集まりました。花を手向けたのちセンターに歩いて帰り、堀江壮さんの被爆証言を聞きました。40人もの人たちがセンターの狭い居間に集まり、彼の話聞きその後話し合いをしました。

午後になって、いまだ約70,000人の遺骨が納められている供養塔の近くに集まり、歌を歌い、詩を朗読し、土盛つちもりの内部に眠っている人たちを慰霊する言葉が読まれました。シーニアはニューヨークからきたゲストが書いた言葉を読みました。「戦争はとても恐ろしい体験であり、核兵器が引き起こした言い表せない破壊によって、もっと多くの苦しみを生みました。権力、土地、支配に対する欲望よりも人の命に対して、敬意をはらわなくてはなりません。世界はヒロシマから学んでほしいと思います。」

夕方、平和公園の原爆の子の像の近くに再び集まり、世界平和と核兵器廃絶のためのメッセージを書きました。一緒に何曲か歌ったあと、メッセージを書いた灯籠を持って、ほかの大勢の参加者とともに灯籠を川へ流しました。灯籠にはろうそくが灯され、川の流れて乗って運ばれていくのを見つめていました。一つ一つのメッセージが海に向かって流れていく景色は忘れられない思い出となりました。二度目の8月6日も私たちにとって大切な思い出になりました。

ハーブ・ツチャファミリーがWFCを訪問

ハーブ・ミノル・ツチャ

2014年8月12日、米国から23名のハーブ・ツチャファミリーがWFCに到着しました。歓迎会で数多くのWFCの友人達と会って大喜びしました。私は、パワーポイントを使って発表しました。それには広島県世羅郡世羅町にいた両親家族の写真が含まれていました。私の両親は米つくりの農家でした。父はモンタナ州に労働者として移住し、米国の鉄道会社に鉄道員として雇用されました。父親は学校の先生になる教育を受けましたが、日露戦争後、日本は経済不況だったので、教職につくことができませんでした。米国に移住し、そこで両親は娘1人と息子6人、合わせて7人の子供を育てました。私は1932年に7人目の子供として誕生しました。

神さまが私の人生にどんな試練を与えたかについて話をしました。私は米国系中国人のバーサ・チン・ラング・ツチャとキリスト教式の結婚式を挙げました。38歳で結婚しました。私はプレスビテリアン信者で、バーサはバプテスト教会信者でした。彼女は、4人の子供をもつ未亡人で元の夫は白血病で他界していました。母は5番目の女の子テリーが生まれるまで自分たちの結婚を認めませんでした。母は孫娘テリーの子守りをしなければならなくなりましたが、その時は祖母であることを喜んでいました。二人がデートしているとき、バーサはとても美味しい料理を作ってくれ、私が行

った時、下の 2 人の子供たちは特に喜んでくれました。子供たちと私は床に座ってゲームをし、遊び友達のような感じでした。子ども達とうまが合うのは私が子供のようにはしゃぐからだとバーサは言っていました。私たちの結婚が 40 年間以上続いたのは、それぞれが別々に働いていたからでした。バーサは、薬局を経営し、彼女の薬局で働き、私は自分の薬局で働きました。バーサは分析的(厳格でこと細やか)であり、子供達へのしつけはきびしかったけれど、私はのんびり屋でおおらかでした。しかし、子供達が彼女に許可を求め、「だめですよ」と言われ、その後私のところへお願いに来た時は、「お母さんがだめといったら、だめだよ」と言っていました。それが今まで続いている秘訣ですよ。(それは冗談ですね)

イエス・キリストを通じて神と個人的で、密な関係を造る上げること、祈りの力、聖書の神の言葉、教会の他の信者達との仲間作り、そして家族の絆が大切だとバーサと私は思っていました。このおかげで毎年、23 名の家族が絆を強めるために休暇中は旅行します。神さまに祝福され、5 人の子供達とその配偶者、それに 12 人の孫に恵まれています。

神さまは、私にふたつの贈り物を与えてくださいました。一つは励ます力、もう一つはもてなす力です。私は誰でも励ましますが、特に未来のある若者を励まします。薬剤師であり、経営者としての 50 年間、修業経験がない若い人達を薬局で雇用することもありました。指導すると、よく働き、誠実で、稼ぐ者もいました。私たちの家庭は神さまから与えられた励ましともてなしの力で包まれていました。親戚、友人、外国人の学生、宣教師、牧師さんたちを家に招き、寝食をともにしました。私たちは神さまの愛に祝福されているので、人の面倒をみて、人を元気にさせることの大切さを信じています。その神の愛をほかの人と分かち合わなければならないのです。子供達や孫達が守っている人生の 3 つのルールは、1 に親切、2 に親切、3 にも親切なのです。



(左から 車地さん、山根さん、ハーブ、小泉さん、西田さん、藤井さん)



(ハーブの 12 人のお孫さん達)

WFC インターンシップ

修道大学人文学部英語英文学科 3回生 森田奈々

(左から、リチャード、長田さん、森田さん、シーニア)

私は将来教員になって平和の学習を広めたいと考えています。なぜなら、広島や長崎以外の県では平和学習があまり行われていないのではないかと感じるからです。私が隣の山口県に住んでいた時、ほとんどの人は原爆の日がいつなのか知りませんでした。また、8月6日に放送されたニュースでは、東京に住む女性が「平和について考えることは大切だけど、広島からは遠いしあまり実感がない」と話していました。それは、私にとって衝撃的な言葉でした。「どうしてこんな大人なのに無関心なの？これじゃあ、子どもたちが知らないのも当たり前だな」と思いました。広島では絶対にそんなことはないのです、開いた口が塞がりませんでした。WFC で、もっともっとヒロシマについて勉強して、広めていきたいと強く思いました。



は、私にとって衝撃的な言葉でした。「どうしてこんな大人なのに無関心なの？これじゃあ、子どもたちが知らないのも当たり前だな」と思いました。広島では絶対にそんなことはないのです、開いた口が塞がりませんでした。WFC で、もっともっとヒロシマについて勉強して、広めていきたいと強く思いました。

インターンシップを通して、今まで知らなかったヒロシマを知ることが出来ました。まず、バーバラ・レイノルズの存在です。“アメリカ人”が戦後、ヒロシマを世界に伝えるため奮起していたと知り驚きました。次に、被爆した人の中に、強制的に連れてこられた多くの韓国人がいたこと、内部被爆した人がたくさんいたこと、当時の人は原爆を“原爆”だと気づいていなかったということなど被爆者の西田吾郎さんから話を聞き、被爆者の視点からヒロシマを見ることが出来ました。また、話を聞く中で、平和とは“小さな思いやり”の積み重ねではないかと思いました。WFC の方々はいつも助け合い、お互いを思いやっています。そこには、いつも良い雰囲気が漂っていて、戦争とは無縁だと思いました。周りの人を思いやることを忘れず、友達の和を広げていくことが1番大切なことなのかもしれないと感じました。今回学んだことを忘れず、将来生かしていけるように、もっと勉強を続けていきたいと思えます。

修道大学人文学部英語英文学科 3 回生 ^{おさだあやね}長田彩音

(左から、エリザベス・チャペル、彩音さん、奈々さん)

9月3日から13日の10日間、私はワールド・フレンドシップ・センターで様々なお仕事をさせて頂きました。私が、WFCをインターンシップ先として希望した理由は主に2つあります。1つは英語を使ってコミュニケーションをとる機会があること、そして2つ目は広島の平和学習に興味があり、平和活動について英語で知ることができると思ったからです。このインターンシップに参加する前までは、正直



WFCに関しては全くの無知でした。しかし、そもそもなぜ外国人の方が館長をなさっているのか、どんな活動や取り組みをなさっているのかと、私の中で疑問がいくつかありました。WFCは主に広島に平和を学びに来る外国のゲストの方が泊まるための研修施設です。日本の生活スタイルが体験でき、ボランティアに平和公園のガイドをしてもらったり、被爆者の話が聞けたりと、さまざまな貴重な体験が出来る特別な施設です。NPOという組織の中で、更に経済的にも限られた中で、外国人の方に対してより良いおもてなしをするにはどうすればよいかを常に考えている姿はとても印象に残っています。また、外国の方に向けた活動だけではなく、私たち日本人のために英会話クラスも週に数回開かれており、実際私も何度か参加させていただきました。老若男女関係なく、さまざまな方が英語を話しており間違っても何度も何度もトライし続けている姿は、自分にとってとてもいい刺激になりました。そのおかげで、実習中は常に英語を使い、積極的に話す事を心がけ、更に自分に足りない部分にも気づく事ができました。私が実習していた期間、あまり多くのゲストとお会いすることは出来ませんでした。館長さんをはじめとするたくさんの方々のおかげで、楽しみながら実習をすることが出来ました。貴重な体験の1つとして、実際に被爆者からお話を伺うことができました。去年の夏、ボランティアとして平和公園をガイドして広島原爆に非常に関心を持ちました。しかし、蓋を開けてみると知っていた「つもり」なだけであり、原爆や平和に対して浅はかな知識しか持っていませんでした。だからこそ、WFCを通してまた新たな知識を得、再認識し、広島で生まれた自分たちこそがもっと平和について考えなければいけないと強く感じました。このインターンを通して、本当にたくさんの素敵な方たちとの出会いがあり、私もこのような方々みたいになりたいなと思いました。また、自分自身の物事に対する考え方も少し変わったような気がして、自分が思っていた以上にたくさんの事を学ぶことが出来ました。本当にありがとうございました。皆さんとの出会いを大切に、これからもまたぜひよろしくお願いたします！

ピースキャンプ

ジム・ロナルド

今年の北東アジア青年ピースキャンプは、7月30日から8月6日まで韓国の北西部の江華島にあるセンターを主な会場にして開催されました。今年は30人の参加者のうち、日本からは10人が参加し、コーディネーターの私を含め、4人の指導者と6人の参加者でした。参加者は、広島から女子中学生2人と男子高校生1人、山口から女子高校生1人、北海道から女子高校生2人でした。指導者は、広島と大阪と北海道から参加しました。仁川空港で韓国の参加者や指導者たちに出迎えられ、中国や北海道からの参加者が到着すると、一緒にバスでユースホステルのような「キャンプサイト」に向かいました。キャンプの様子を知るために、参加者の体験談を読んでもください。

ピースキャンプに参加して

山口県立厚狭高等学校 齊藤友里 16歳

(左から、齊藤友里さん、渡辺沙弥香さん、中島琴美さん)

私はピースキャンプに参加して本当に良かったと胸を張って言えます。実際に体験するまでは楽しみよりも、いろいろな不安のほうが大きかったのですが、そのような不安は全て楽しさに変わりました。



今回の開催地は韓国ということで、行くまでに家

族や友人から「大丈夫なの？」という言葉が何度もかけられました。私自身はそこまでは心配していませんでしたが、テレビのニュースや新聞を見て、安全なのかと心配していました。

しかし、実際の韓国はとても良い国で、心配する事はひとつもありませんでした。そして、韓国人も中国人もとても優しく、親しみやすい人ばかりでした。テレビから見ると反日の印象が強く、すごく遠い存在だと思っていましたが、そのような事はありませんでした。それは、このキャンプに参加していた人だけでなく、韓国の店員さんや同じホテルで偶然顔を合わせた人達にも共通していました。私が日本人だという事が分かってもしんなやかな顔をせず、笑顔で接してくれたのです。私は純粋にその事が嬉しかったです。

このキャンプで私は初めて外国の友達をつくりました。みんなで歌ったりゲームをしたり、平和について話し合ったりして親睦を深めました。話をしながら食事したり、空き時間にはトランプをそれぞれの国のルールで楽しんだり、英語をあまり話せない私にも仲良くなる方法はあるのだと気付かされました。

平和について話し合っただけでなく、歴史館や博物館にもいくつか行きました。江華平和展望台では、自分の目で初めて北朝鮮を見ました。韓国にこのような、北朝鮮との平和的統一を望む建物があるとは知りませんでした。韓国人のカウンセラーは涙ながらにこの状況に対して、「助けて」と言っていました。いつ起こるのかわからない戦争に対しての思いはみんな共通なのだと思います。そして、この世界から「戦争」という選択肢を失くして平和を築いていかなければならないと強く思いました。日本は集団的自衛権が発足したため、徐々に戦争に近づいているように思います。私の力は小さいかもしれませんが、この力をまわりの人に伝えると大きな力になると思うのです。このキャンプに参加して、改めてそのような事を感じました。とても良い経験になりました。もっとたくさんの人にこのような経験をしてほしいと思います。

韓国でのピースキャンプ 広島市立矢野中学校 3年生 渡辺沙弥香 15歳

私は7月30日～8月6日に行われた2014年ピースキャンプに参加しました。ピースキャンプに参加する前の韓国、中国の事はニュースでしか知らなかったのも、あまりいいイメージがなかったです。でもテレビを見るだけで直接会って話さないと本当の事がわからないし、友達もいたので参加しました。でも思っていたイメージと全然違いました。みんな、優しく、気軽に話しかけてくれました。私は勝手にイメージしていたのが、はずかしくなりました。すごく申し訳ない気持ちになりました。これからは偏見を持たないようにしようと思いました。

ピースキャンプで一番楽しかった事は Cultural Night でした！！日本人参加者は、手話で「世界に一つだけの花」と「よきこいソーラン」をしました。「よきこいソーラン」でみんなが踊りをまねしてくれ、掛け声ですごく盛り上がりました♪♪終わってほしくないなあと思いました。

一番悲しかった事はナムムの家日本軍「慰安婦」歴史館国際平和人権センターで聞いた、「慰安婦」の話でした。説明を聞いていて、泣きそうになりました。カウンセラーの人がこういう活動をしていて「自分がなんで日本人なんだろう」と言っていたのを思い出し、自分も日本人であるのがつらくなってきました。

ピースキャンプが終わって思った事は、学んだ事、経験した事を、まわりの人に伝えていこうという事です。戦争を体験した人達が高齢になっていて、平和の大切さ、戦争のおそろしさを語る人が少なくなっているから、若い人達がこういう活動に参加して、伝える事をしてほしいと思いました。私も、これからは、自分に出来る事はやろうと思いました。

ピースキャンプ

(中国、韓国からの参加者と一緒の琴美さん)

広島市立矢野中学校 3 年生 中島琴美 15 歳

私は今回初めてピースキャンプに参加させて頂きました。母からこのキャンプの話を知り、「中国人や韓国人の友達をつくりたい!」と思い、参加を決めました。しかし、楽しみな反面、「韓国や中国の人は日本人が嫌いなのでは」と不安に感じていました。



しかし、キャンプの参加者は優しく、皆と仲良くなり、楽しい日々を過ごす事ができました。英語が下手で、もっと勉強しておけばよかったと後悔しながらも、つたない英語にジェスチャーを交えながら、「皆ともっとしゃべりたい!」の一心で、自分からも話しかけました。

毎日楽しく、一日一日がすぐに過ぎていきました。一緒に食事、会話、ゲーム、買い物、平和学習など、たくさんの事をしました。信じられないほど楽しく、充実した日々でした。

平和学習で、ナヌムの家日本軍「慰安婦」歴史館国際平和人権センターを訪れました。そこには、日本軍が行ったとされる「慰安婦」問題についての展示、ハルモニと呼ばれる被害者の方々についての展示、「咲きれなかった花」などのハルモニの方々の絵画作品の展示などがありました。たくさんのメッセージが寄せられており、日本人からのメッセージの中には、「憲法第 9 条を守りぬきます」と書いてあるものがありました。しかし、そのメッセージとは裏腹に、憲法第 9 条の解釈を変えようとしている今の日本の動きを悲しく感じました。



(北海道から参加の、中村圭那さん、札幌第一高等学校 3 年生、中村日南さん、札幌聖心女子学園高等学校 3 年生)

私は最初、「韓国や中国の人達は日本人が嫌いなのでは」と不安に感じていましたが、キャンプ参加者は優しく、同じホステルに泊まっていた韓国人の人達 から、あからさまに嫌がられるような事はありませんでした。日本人嫌いの人もいるとは思いますが、それが 一般的だ、というわけではないと知りました。また、自分が固定観念を持っていた事にも気付きました。

今回のキャンプの参加を自信にし、もっと積極的に国際交流に参加するなど、この経験を活かしていきたいと思います。